

I 2014年度大学評価委員会の評価結果への対応

2014年度大学評価委員会の評価結果はおおむね好意的だったが、内部質保証に関しては、より具体的な記述を求められた。具体的な記述が足りないのは、能楽研究の活動の中で内部質保証の面が弱いことの正確な現れと理解している。能楽研究所は専任二名の小所帯で、問題の認識も解決策の検討も日々の研究活動の中で済んでしまうため、研究成果を挙げることを優先して内部質保証の「システムを作る」という点が後回しになってきた。従来、能楽研究所の運営委員会を内部質保証に直接関わる組織として位置づけてきたが、2014年度からは、従来報告事項にしていた個々の研究活動についても、運営委員会の場で正式に審議・検証し、記録に残すように変更した。また2015年度からは個別の活動についての検討だけでなく、年間の事業計画や長期の見通しなどについても、運営委員会の議題とし、検討できるようにしていく予定である。

II 現状分析

1 理念・目的
1.1 理念・目的は、適切に設定されているか。
<p>①研究所（研究センター）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。</p> <p>設定されている。また、その理念・目的は、能楽研究所のパンフレットに以下のように明示されている。</p> <p>「能楽研究所の目的は、中世に生まれた日本最古の演劇である能楽（能・狂言）の、歴史的変遷を調査・研究するとともに、現代に生きる演劇としての魅力や芸術性を解明し、能楽研究の発展と能楽の振興を目指すことにあります」</p> <p>能楽研究所の諸活動は、この理念・目的に基づいて行われている。</p>
1.2 理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。
<p>①理念・目的はホームページ等で、社会一般に対して周知・公表されていますか。</p> <p>能楽研究所のホームページにおいて、以下のアドレスで公表されている。</p> <p>http://nohken.ws.hosei.ac.jp/about/greeting.html</p>
1.3 理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
<p>①理念・目的の適切性を定期的に検証していますか。また、その検証プロセスを説明してください。</p> <p>上記1.1に記した理念・目的は頻繁に変更を要するものではないと、基本的には考えている。</p> <p>a. 学内の運営委員で構成されている運営委員会の定例会議で、研究所の活動の適切性について検証を行う際に、その基準となる理念・目的自体の適切性も再確認している。</p> <p>b. 「能楽の国際・学際的研究拠点」としての申請書を作成する過程で、上記の理念・目的が「国際・学際的」研究拠点としての活動と齟齬をきたすことがないかを検討し、問題ないと判断した。</p> <p>c. 拠点の運営委員会（外部の有識者を含めた11名から成る）において、年度初めと年度末の二回、研究所の年間の活動予定・活動成果についての総括と検証を、上記の理念に基づいておこなっている。</p>
2 研究活動
2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2014年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動の実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/achievement/
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
<p>* 研究所としての刊行物 http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/</p> <p>http://nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/nohgaku.html</p> <p>* 専任所員の研究成果</p> <p>http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002297/booksorpapar.html</p> <p>http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002297/theses.html</p> <p>http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/booksorpapar.html</p> <p>http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/theses.html</p> <p>http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/meeting_achieve.html</p>
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文引用等）
<p>能楽研究において最も権威ある学会誌『能と狂言』の最新号13号は、研究所で出版した『鴻山文庫蔵能楽資料解題 下』、専任所員監修の『世阿弥のことば一〇〇選』の紹介記事を掲載しているほか、専任所員2名がともに寄稿した研究論集『観世元章の世界』の書評記事の中で2名の論文それぞれについても言及している。同じく藝能史研究において権威ある学会誌</p>

『藝能史研究』でも、『鴻山文庫蔵能楽資料解題 下』の紹介記事を載せるほか、専任所員が中心となって執筆・編集した『粟谷家所蔵 能面選』が紹介されている。個々の論文の引用状況は追いきれていないが、一例を挙げるなら、上記『観世元章の世界』では計8名の研究者により専任2名の論文がそれぞれ7回ずつ引用されており、参照すべき業績として学会でも評価されていると言える。

④研究所（研究センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

共同利用・共同研究拠点の運営委員会（学外委員が半数以上）が、拠点としての能楽研究所の組織運営や研究活動について評価と助言を行っている。（1.3 参照）

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

文科省の定める「能楽の国際・学際的研究拠点」に認定され、2014年度は2419万円の資金を獲得しているほか、専任所員それぞれ、他大学の科学研究費による研究の分担者としても活動している。

3 管理運営

3.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①所長（センター長）をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

所長と専任所員、兼担所員からなる運営委員会の組織を設け、「野上記念法政大学能楽研究所規程」に則った運営を行っている。

4 内部質保証

4.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証に関する各種委員会は適切に活動していますか。

専任所員二名と、三学部の教員（兼担所員）から成る運営委員会（月1回開催）で研究活動、外部機関との連携、社会還元等について報告し、問題があれば対応策や改善策を討議し、その結果にしたがって必要な修正をおこなう、というシステムを作っている。

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

専任所員は上記運営委員会に必ず出席している。

社会連携・社会貢献【任意項目】

教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。

・教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動（シンポジウムや公開講座、資料の公開など）を行っていますか。

行っている。2014年度は以下のシンポジウム・公開講座・資料展示を実施した。

シンポジウム「金春家文書の世界」（9月15日）

展示「金春家文書の世界」（9月13日～10月6日）

能楽セミナー「能楽の現在と未来」（10月19日、26日、11月10日）

シンポジウム「江戸初期筆「秋田城介型付」の復元：報告と討議」（11月24日）

公開講座「よみがえる鼓胴—山崎家伝来「錠図薔梨」の音色を聴く—」（2月27日）

シンポジウム「伝統芸能の伝承と人材育成」（3月7日）（イノベーション・マネジメント研究センターと共催）

・学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組みを行っていますか。

行っている。上記シンポジウム・公開講座には、能楽シテ方金春流の演者の全面的な協力があつたほか、国文学研究資料館、東京文化財研究所の研究者の参画があつた。また、「能楽の国際・学際的研究拠点」の活動として、学外組織との連携協力を目指した共同研究の公募を行っており、2014年度は5件を採択した。

・地域交流や国際交流事業に関する取り組みを行っていますか。

行っている。2014年度は、ドイツ・ハンブルク大学、京都市立芸術大学の研究者とともに、スロヴェニアのリュブリャナ大学で開催される EAJS 大会に参加し、「能の伝承と「素人」」をテーマとするパネルディスカッションを行ったほか、英語版能楽事典の作成に向けて、欧米の研究者と数回の打ち合わせを行った。

・その他部局で取り組んでいる重点事項があれば記載してください。

能楽研究所が2013年度から「能楽の国際・学際的研究拠点」に認定され、学外組織や国外の研究者との共同研究の機会が大幅に増えている。その成果としての刊行物も、2014年度には4冊刊行した。日本屈指の能楽資料を有する能楽研究所の責務として、貴重な能楽資料の電子公開にも重点的に取り組んでおり、2014年度には、金春家旧伝の能楽資料を中心に、新たに1800点を超える能楽資料をデジタルアーカイブ上に公開した。

現状分析根拠資料一覧

資料番号	資料名
------	-----

1 理念・目的	
①	能楽研究所パンフレット
②	http://nohken.ws.hosei.ac.jp/about/greeting.html
2 研究活動	
③	http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/achievement/
④	http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/
⑤	http://nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/nohgaku.html
⑥	http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002297/booksorpapar.html
⑦	http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002297/theses.html
⑧	http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/booksorpapar.html
⑨	http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/theses.html
⑩	http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001731/meeting_achieve.html
⑪	「能楽の国際的・学際的研究拠点」運営委員会議事録
3 管理運営	
⑫	野上記念法政大学能楽研究所規程
⑬	能楽研究所運営委員会議事録
4 内部質保証	
⑭	能楽研究所運営委員会議事録
社会連携・社会貢献	
⑮	http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/achievement/

Ⅲ. 研究所の重点目標

学際的・国際的な能楽研究拠点に相応しい体制を整えるため、現在、拠点と協力関係を持っている多様な研究者を柔軟に兼担所員に迎えることができるよう、専任・兼任・兼担所員の新たな体制づくりをめざす。そのために、現行の野上記念法政大学能楽研究所規程の所員に関する部分の見直しを行い、改正案を運営委員会に提出し、審議を経た上で今年度中の改正を実現させる。

Ⅳ 2014 年度目標達成状況

No	評価基準	教員・教員組織					
1	中期目標	能楽研究の拠点にふさわしく、高度な専門性を備え、かつ幅広い領域をカバーできる教員組織をめざす。					
	年度目標	学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい、専任・兼任・兼担・客員所員の体制を整備する。					
	達成指標	能と関連領域とに知見を有する兼任所員と、研究活動の国際的展開に関して助力を得られるような兼担所員、各1名を確保する。					
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>能楽研究に深い知見を有する研究者に加え、特に現在進行中の研究プロジェクトに合わせてキリシタン文献の研究者を加えることができた。国政的展開にふさわしい兼担所員を新たに確保することはできなかった。代わりに建築史の専門家を兼担所員として迎え江戸時代の能舞台に関する学際研究を進めることができた。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>外国人教員や外国演劇の研究者など、能楽研究の国際化にふさわしい人材を兼担所員として迎えられるよう、引き続き努力する。</td> </tr> </table>	自己評価	A	理由	能楽研究に深い知見を有する研究者に加え、特に現在進行中の研究プロジェクトに合わせてキリシタン文献の研究者を加えることができた。国政的展開にふさわしい兼担所員を新たに確保することはできなかった。代わりに建築史の専門家を兼担所員として迎え江戸時代の能舞台に関する学際研究を進めることができた。	改善策
自己評価	A						
理由	能楽研究に深い知見を有する研究者に加え、特に現在進行中の研究プロジェクトに合わせてキリシタン文献の研究者を加えることができた。国政的展開にふさわしい兼担所員を新たに確保することはできなかった。代わりに建築史の専門家を兼担所員として迎え江戸時代の能舞台に関する学際研究を進めることができた。						
改善策	外国人教員や外国演劇の研究者など、能楽研究の国際化にふさわしい人材を兼担所員として迎えられるよう、引き続き努力する。						
No	評価基準	教育研究等環境					
2	中期目標	個々の教員が研究成果を挙げるだけでなく、研究所としてのまとまった成果を発信していけるような環境を整備する。					
	年度目標	若手研究者を育てる目的でおこなってきた従来の「若手研究会」とは別に、能楽研究叢書・能楽資料叢書の刊行やセミナーの充実に向けて、所員を中心とした研究会を定期的に開催する。					
	達成指標	研究叢書・資料叢書に結びつく研究会（所員中心だが外部研究者を排除するものではない）を年間10回以上開催。					
	年度末	自己評価	S				

	報告	理由	型付輪読の研究会 9 回、嚙子伝書解読の研究会 11 回、謡本研究会 2 回、能舞台復元の研究会 2 回、計 24 回の研究会を開催。どれも所員を中心に、外部研究者とともにあった。
		改善策	—
No	評価基準		社会連携・社会貢献
3	中期目標		学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい形で、研究資源と研究成果をより積極的に社会に還元していく。
	年度目標		資料展示、各種セミナー、資料のデジタル化とウェブ上での公開等をさらに推進する。研究拠点としてのホームページにも英語版を作成する。
	達成指標		年度内に研究拠点のホームページに英語版を追加。デジタルアーカイブに新資料 20 点を追加。展示つきのセミナー、シンポジウム 2 回。実演つきのセミナー 1 回。
	年度末報告	自己評価	S
理由		研究拠点の英語版ホームページのアップは 3 月末に完了。デジタルアーカイブに新資料約 130 点を追加。展示付きのシンポジウム 1 回。展示・実演付きのセミナー 1 回。実演映像付きのセミナー 4 回。すべて一般に公開。	
		改善策	—

V 2015 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	能楽研究の拠点にふさわしく、高度な専門性を備え、かつ幅広い領域をカバーできる教員組織をめざす。
	年度目標	学際的・国際的な能楽研究拠点に相応しい、専任・兼任・兼担所員の体制を整備する。
	達成指標	多様な共同研究のメンバーを柔軟に兼担所員に迎えることができるよう、規程の改正をめざす。
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	個々の教員が研究成果を挙げるだけでなく、研究所としてのまとまった成果を発信していけるような環境を整備する。
	年度目標	能楽研究叢書・能楽資料叢書の刊行を継続していく。所員を中心として進めてきた研究会をさらに外に向けて広げ、学外の研究者との共同研究や、海外の研究者との研究会もおこなう。
	達成指標	研究叢書・資料叢書を 3 冊以上刊行。研究所外の研究者を含む研究会を年 10 回以上開催。海外の研究者を含む研究会を 1 回以上開催。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい形で、研究資源と研究成果をより積極的に社会に還元していく。
	年度目標	資料展示、各種セミナー、資料のデジタル化とウェブ上での公開等をさらに推進する。その際、学外諸機関との連携を積極的にめざす。
	達成指標	資料展示・各種セミナーを年 2 回以上、学外機関との連携による学会・シンポジウム等を年 2 回以上開催。デジタルアーカイブに新資料 20 点を追加。

VI 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

VII 大学評価報告書

<p>大学評価委員会の評価結果への対応に関する所見</p> <p>能楽研究所では、2014 年度に大学評価委員会で指摘された内部質保証に関して、今回の現状分析についても「具体的な記述が望ましい」が、その理由を「研究成果を上げることを優先して内部質保証の「システムを作る」という点が後回しになってきた」と自己分析している。そして、昨年度から従来報告事項であった研究活動について運営委員会で検証し記録に残すように改善している点は評価できる。</p> <p>さらに、2015 年度からは各活動だけでなく事業計画や長期見通し等も、運営委員会で議題として検討できるようにすることであり、成果が期待できる。</p> <p>現状分析に関する所見</p>

1 理念・目的
1.1 理念・目的は、適切に設定されているか。 能楽研究所では、研究所の目指す方向性を明らかにした理念・目的が適切な形で設定され、明示されている。
1.2 理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。 能楽研究所の理念・目的は、ホームページ等を通して、日本語だけでなく英語でも公表されている。
1.3 理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。 能楽研究所では、学内委員から成る定例の運営委員会で、理念・目的の適切性について確認している。 また、外部有識者も参加する「能楽の国際・学際的研究拠点」運営委員会において、活動成果の総括、検証をする際にも理念を確認していることは評価できる。
2 研究活動
2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。 能楽研究所における2014年度の研究・活動実績としては、2014年5月に特別講演会「謡曲における親子表現—ことわざの引用に注目して」、9月にシンポジウム「金春家文書の世界—文書が語る金春家の歩み—」、10月～11月に能楽セミナー「能楽の現在と未来」3回、さらに11月研究集会「江戸初期筆「秋田城介型付」の復元：報告と討議」、2015年2月に研究集会「よみがえる鼓胴—山崎家伝来「錠図帯梨（じょうずへたなし）」の音色を聴く—」等、幅広いテーマで積極的に開催しているのは高く評価できる。 対外的に発表した研究成果としては、2015年3月に紀要「能楽研究39」を始め、能楽研究叢書3『EXPRESSIONS OF THE INVISIBLE: a comparative study of noh and other theatrical traditions』（Edited by M. Watson and R. Yamanaka）、同じく叢書4『野上豊一郎の能楽研究』（伊海孝充編）、および能楽資料叢書として『大蔵虎清 間・風流伝書』、『金春安住集 歌舞後考録・御用留』、『東北大学附属図書館蔵 秋田城介型付』等を刊行している。また、2名の専任所員も、著書1、論文6、研究発表1と十分な研究成果を上げている。 研究成果に対する社会的評価としては、能楽研究、藝能史研究において権威ある各学会誌で、当研究所の出版物や専任所員の監修した書について紹介され、また専任が寄稿した論文についても書評記事において言及されている。研究所員の論文に関する引用も数多くあり、学会などでの評価も高いと言える。 研究所に対する外部からの組織評価については、学外委員が過半数参加する（共同利用・共同研究拠点の）運営委員会が、当研究所の組織運営について評価している。 外部資金の獲得・応募状況については、2013年度「能楽の国際・学際的研究拠点」に認定され、2014年度は2400万円超の資金を得ている他、専任所員2名とも、研究分担者として他大学の科研費を獲得している。
3 管理運営
3.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。 「野上記念法政大学能楽研究所規定」に則り、所長、専任所員、兼任所員で構成される運営委員会を設け、研究所を運営している。
4 内部質保証
4.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。 能楽研究所では、月1回開催する運営委員会で定期的に自己点検活動を行っている。 上記運営委員会に専任所員は必ず出席しているとあるが、より具体的な状況の説明が望ましい。
教育研究等環境【任意項目】
研究倫理を遵守するために必要な措置をとっているか。 現時点では行なわれていない。 ただし、能楽の国際・学際的研究拠点の活動により、従来とは異なる分野の研究者との共同研究も増えてきているので、能楽研究所のメンバーも共著者として名前を連ねて論文発表する機会も出てきている。こうした事情を踏まえ、貴重資料の所蔵権の侵害や剽窃など、従来から気をつけていた点も含め、さまざまな学会での研究ルールを確認し、能楽研究所の業務に関わる総ての研究者に周知徹底していく方向での努力が見られる。
社会連携・社会貢献【任意項目】
教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。 能楽研究所において、教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動として、シンポジウム、公開講座、展示、セミナーなどを非常に積極的に行っていることは、高く評価できる。 シンポジウムや公開講座には学外研究者も参加ほか、「能楽の国際・学際的研究拠点」として学外組織との共同研究を公募し、連携を進めていることは大変優れた取り組みである。

また、国内外の研究者との交流だけでなく、英語版能楽事典作成等の共同作業は大きな成果が期待される。さらに、能楽資料の電子公開にも取り組んでおり、2014年度には1800点以上をデジタルアーカイブ上に公開している。

当研究所のさまざまな活動とその成果は極めて重要で、高く評価できる。

2014年度目標の達成状況に関する所見

能楽研究所の2014年度の目標達成状況について、以下の全ての面で着々と進展させている。

「教員・教員組織」においては、研究プロジェクトに合ったキリシタン文献の研究者や、建築史を専門とする兼任所員を新たに加えることができたことは評価できる。

また、「教育研究等環境」、「社会連携・社会貢献」においても目標達成のための努力と活動は目覚ましく、高く評価できる。

2015年度中期・年度目標に関する所見

能楽研究所の2015年度目標に関し、「教員・教員組織」について、学際的かつ国際的な共同研究をさらに推進できる体制を整えること、また、そのための規程の改正も視野に入れた目標設定は高く評価できる。「教育研究等環境」については、研究叢書の刊行、海外の研究者を含む共同研究会の開催等、極めて高い指標設定であるが、これまでの実績を見ると納得できる目標設定だと言えよう。さらに、「社会連携・社会貢献」についても更なる努力目標が妥当な形で設定されている。

総評

能楽研究所が、学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい体制を整えるために、定期的研究会の開催を始めとした研究成果の着実な蓄積、社会貢献の一環としてのデジタルアーカイブの資料群の整備や各種セミナーの開催などを含めて非常に意欲的な取り組みを日常的に続けている点は高く評価できる点である。こうした研究資源や研究活動の成果を、引き続き、国内、海外に積極的に発信していくことを大いに期待したい。